

# Bluff Archives News Letter

第3号 2025年3月

発行 NPO法人横浜山手アーカイブス

## 「NFA」コレクション2025春－横浜と映画」から

この3月7～23日まで、東京・京橋の国立映画アーカイブで「横浜と映画」という小特集が組まれている。“絵になる街”とも言われる横浜は度々映画のロケ地・舞台となり、数多くの映画が製作されてきた。横浜山手アーカイブスは、〈映画ロケーションと山手〉をテーマに勉強会を開いてきたが、今回の上映作品にも山手周辺が登場するので取り上げてみた。

映画の揺籃期には中区山手町にも撮影所があり、その場所（現在は元町公園内）に「大正活映撮影所跡」の記念碑が立つ。浅野セメントを興した浅野総一郎の次男良三の経営する東洋汽船の出資で1920（大正9）年作られた撮影所は、監督に米国帰りのトーマス栗原喜三郎を、文芸顧問に谷崎潤一郎を迎え、『アマチュア倶楽部』など数本の映画を製作したが、長くは続かず、わずか2年余りで活動を終えている。



### 横浜をロケ地・舞台にした映画

右ポスター写真は、『月曜日のユカ』（中平康監督、1964年）。加賀まりこ演じる小悪魔的な18歳のユカが様々な男たちと付き合いながら生きる刹那的な異色青春ラブストーリーである。ユカの家は、山手に隣接する本牧の丘の上にあり、本牧通りにはまだ市電が走っている。



横浜港や元町商店街がロケ地となり、八聖殿も衝撃的なエピソードの中で登場する。根岸本牧地区の米軍住宅、山下町のホテル・ニューグランドなどがモダンなタッチで捉えられ、1964年東京オリンピックの頃の横浜の風景がスタイリッシュに切り取られている。

今回の特集には、前田陽一監督の映画が2本ある。『虹をわたって』（1972年）は、人気絶頂期の天地真理の主演映画。家出娘のマリ（天地）がある日、中村川の西之橋脇に係留されるダルマ船を改造した水上ホテルにやって来て、その船の住人たちと親しくなる。彼女を中心に巻き起こるドタバタを描いたアイドル歌謡映画であるが、沢田研二や萩原健一も登場し、当時の彼らの若さが眩しい。この映画にも米軍住宅の立ち並ぶ地区や富裕層が住む丘陵の住宅地が登場する。父の再婚相手（日色ともゑ）がマリを背負って山手の家に戻っていく背後には、赤と白に塗られた改修前のマリタワーが見える。中村川沿いと山手、距離の上では近いが、階層の違いを鮮明に浮かび上がらせた映画でもある。

### 映画に映し出される懐かしい情景

『虹をわたって』から10年後に製作された『喜劇 家族同盟』（1983年）は、戦災で家族を失い、山下公園で寝起きするホームレスの老人（有島一郎）が大金を拾い、港湾労働者の青年（中村雅俊）を息子になってくれと口説き、二世家族をつくる。血の繋がらないもの同士が集まって、家族ごっこをしているうちに本物の家族のように結ばれていく物語。当時、中村川から元町を抜けて、山手隧道の向こうに住んでいた監督の生活者の目線が活かされ、中村川沿い風景や旧三吉演芸場、山手に向かう坂道の家などが描かれる。首都高速道路の建設工事によって古き横浜が失われていくことを憂えた前田監督の横浜への思いに溢れた映画である。

成瀬巳喜男監督の作品『ひき逃げ』（1966年）では山手町の西端打越から根岸台へと向かう丘陵地に位置する山元町の一帯が主な舞台となる。中華料理店で働く国子（高峰秀子）は自動車の接触事故で一人息子を亡くし、事故を起こしたと思われる会社重役の妻絹子（司葉子）の家庭に家政婦として入り込み、復讐の機会を伺う。交通事故の多発という当時の社会状況を反映した映画であるが、国子が絹子の息子を連れて外出し、良からめ妄想する場所は、まだ高いフェンスが設けられていない打越橋、車が行き交う商店街も登場する。

映画のロケ地は、その作品をより相応しく表現するために選ばれた場所にすぎないが、映画が製作された年代の街の様子をよく切り取っている。街は年々変貌していくが、映画は〈記憶〉を蘇らせてくれる貴重なものでもある。（N）

<参考資料>

「NFA」コレクション2025春－横浜と映画」パンフレット

『かながわシネマ風土記』丸岡澄夫 かちめ文庫

『シネマ・シティ－横浜と映画－』展示横浜都市発展記念館・横浜開港資料館編